

PEOPLE OF KOBE 〈10〉

文・野口武彦 〈神戸大学文学部助教授〉

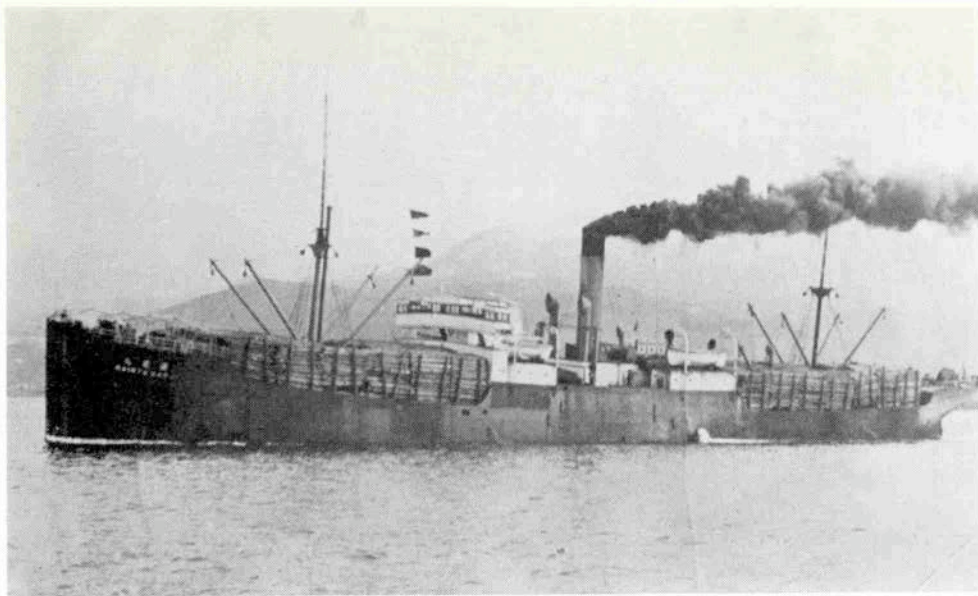
# 七つの海をめぐる

# 半世紀

海に生涯を賭けた

# 荒谷哲四郎さん

生まれたところは日本アルプスの麓だった。越中富山それも飛騨に近い山村に呱呱の声をあげた人物が、なぜ船乗り暮らしを選んだのか。山国生まれなるが故の海へのあこがれ。荒谷哲四郎さんはずばりとそう答えてくれた。



煙を出しながら航行する海電丸（昭和3年～8年まで乗船）

荒谷さんは、昭和四十五年、七十一歳の年齢で陸にあらがるまで無慮五十有余年、七つの大洋をめぐった海の男である。明治三十二年（一八九九）、富山県の山村の前川家に生まれ、のち故あって荒谷姓を襲う。県立富山商船学校を卒業して船員になる途を選んだのは、一つには養家荒谷家が北前船の船主であったことにもよる。北前船。人も知るように、北は蝦夷地から西は玄海灘まで日本海の沿岸交易を手がけた由緒ある海運である。山国育ちの荒谷さんは、こうして生涯を海に結びつけることになったのだ。荒谷さんの航海歴は、大正七年（一九一八）の処女練習航海にはじまる。その第一回が、すでに冒険のはじまりであった。練習生たちを乗せた船は舵が折れて漂流をはじめ、カムチャッカのオグルコモアに漂着する。そのとき一同の危難を救ってくれたのは、なんと白系ロシアの義勇艦隊であった。一九一七年といえば第一次世界大戦が内乱に転化し、ロシア革命が勃発した年である。たまたまオホーツク海域を遊弋していたロシア帝国末期の海軍に、幸いにも生命を救われたというわけだった。

そんな体験が荒谷さんの気力をくじけさせなかったことはもちろんである。奇貨おくべし。荒谷さんの海へのファイトはますます燃えさかる。次の航海は碇泊訓練。ちなみにそのとき乗り込んだ柳星丸は九百八十三屯の帆船だったという。世界最大の帆船といわれる海洋丸はおよそ三千屯だというから、決して大きな船ではない。がこの訓練は、荒谷さんが翌大正八年（一九一九）に経験することになる最初の大航海に必要な準備を与えたものと推察される。横浜を出航し、中部太平洋のクラリオン島を経て、チリのバルパライソへ、片道百四十日の長期航海へと、二十歳の荒谷さんは乗り出して行くのである。

わずか九百八十三屯の柳星丸で太平洋を横断す

る。荒谷さんのお話では、これは日本では最初にして最後の帆船による大航海であった。日本から石炭とセメントおよそ千五百屯を積み込み、帰路にはチリ硝石を満載して国に帰る。無電設備もない時代のこととて、横浜に入港したその日がちょうど第一次世界大戦の戦勝祝賀の日だったというおまけまでついている。何の気なしに港に近づいてゆくと、いきなり軍艦に水路をふさがれた。なんとそれは観艦式の当日で、お召し艦の通過を待たねばならず、柳屋丸は急拠満船飾をととのえて当座に間に合わせたという。

しかし、荒谷さんの物語がひとときわ精彩を放つのは、どこまでもはてしなくひろがる大海原の生態である。船は貿易風に乗ってゆつたりと進む。貿易風。なんら海についての知識をもたないわたしにも、ゆたかな想像の翼をひろげさせる言葉である。北半球では東北の風、赤道近くでは東寄り、南半球ではそれが南東の風に変わる。そして一昼夜半は続くという赤道無風帯。時速五、六哩で波に乗ってゆくと、カツオの魚群が船をしたってついてくる。冷蔵庫などはあるはずがない。罐詰ばかりで生きている船乗りにとつて、新鮮な魚肉はいかに美味だったことだろうか。そして太平洋に浮かぶ無人島には、産卵期のウミガメが船乗りたちを待っていた。もちろん、餌で突かれて食われるためである。年長の水夫は、ウミガメが泣いていたといって肉を食わなかったという。

制服に身を固めた若き日の荒谷さん（26才）



二十歳の荒谷さんが、それを意に介さずもりもりと平らげたのは、青春の名誉であつてもなんら不名誉ではありえない。

商船学校卒業の後、荒谷さんがたどった海の男のキャリアを、このみじかい紙数で語ることはとても不可能である。荒谷さんは目下五十有余年の海洋生活の回想録をほとんど仕上げられ、いまやその上梓も真近と聞く。読者諸賢においては、直接それについて潮風のかおり、怒涛のためき……「海」の醍醐味を綴っていたいただきたいと願う次第である。わたしはただ、荒谷さんの楽しい物語を聞きながらいっしょに打ち興じた会話の断片をここにお伝えするにすぎない。荒谷さんがわたしに見せて下さった海図には、半世紀以上の歳月をけみする航跡がびっしりと書き込まれている。「私の船旅のあと」と謙抑にも書き込まれたその記録のうちから、わずかに二、三のエピソードしかご紹介できないのが残念なくらいである。大正十一年（一九二二）、国際汽船会社に勤務した荒谷さんは、貨物船の三等航海士——その時代は三等運輸士といったそうである——として、一年の八ヶ月の長旅に出る。横浜からまず空船でバンクーバーへ、そこで欧州向けの小麦を積み込んで、パナマ運河を経由してスコットランドのハルへ寄港。小麦を陸揚げした後、コーンウォールのフォーウェイで白粘土を積載し、今度はフィラデルフィアに向かう。次いでキューバに船を転じた船

門司出港油運送特攻隊（昭和20年）



雄南丸にて、キャプテン時代



は砂糖の積荷とともにリヴァプールへとってかえし、船艙に石炭をつめこんでチャールストンに戻る。こうして書いていったら、いつまでたってもキリがないが、要するに大西洋とこり狭しと動きまわる明日を定めぬマドロス稼業の毎日が続くのである。ロンドンの海運市場に国際汽船の出先機関があり、市況のおもむくままに、今日は東、明日は西、ひとたび日本の港を出たが最後、いつ降りつけるかわからない漂泊の船旅であった。

こんな面白い話もある。イタリヤから定期的に輸出される雑貨品を積み込んで、一路アメリカに向かったところのことである。ちょうどジブラルタル海峡を出たところで、船艙にひそむ密航者三十人（ノ）が発見された。南イタリヤ特産のレモンの積荷。果実の腐敗をふせぐためにとってあるわずかな荷箱の隙間に、密航者たちは食糧もちゃんと用意して、身をひそめていたという。行先は



アラビア半島オーマン国ドバイにてラクダのキャラバン隊と共に。  
（左から三人目）昭和33年。

ニューヨーク港のブルックリン波止場。ここにはイタリヤからの密航者の受入れルートが完備していて、船の人間が眼をつぶれば、陸揚げされた連中はそのまま大都会の闇に消えてゆく仕組みになっている。だがもしそれが発覚すれば、船会社は一人につき千ドルの罰金を払わなければならぬ。けっきょく密航者たちはニューヨークの市当局にひきわたされ、強制送還の憂き目を見たということである。さきほど紹介した大西洋の貨物船航路の往来が、いみじくも当時の欧米貿易の縮図であったように、この密航者のエピソードも一九二〇年代のアメリカ社会の断面をゆかりなくも照らし出している。移民でできあがったアメリカ社会は、同時にまた、先着者の既得

権をおびやかす移民の新しい波を極度に警戒する。にもかわらず、資本は低賃金の労働力を必要とする。尨大な数のイタリヤ移民と密航者たちが、その貧困と団結力を背景に作り上げたのがマフィアの組織だったことはよく知られている。二〇年代のアメリカはまだギャングたちの草創期であった。荒谷さんの船にのりこんだ三十人のうちにはやがてアル・カボネの右腕になる人材がいたかもしれないのである。似たような密航事件はギリシアでも起こった。しかし今回は、四人のギリシア人密航者をもよりの寄港地チュニジアのビゼルタで棧橋に放り上げたそうである。ともかくもそんな多彩な出来事を盛り込んだこの航海は、大正十二年（一九二二）九月二日、ボストンへの入港によって一段落を告げる。その日のアメリカの新聞の朝刊に、荒谷さんが見出したのは関東大震災の速報だった。死傷者五百万。伊豆の大島陥没す。さいわいこれは時間がたつにつれて誤報とわかったが、このニュースにはさすがの荒谷さんといえども心細い思いをしたことだろう。しかし、船会社とは非情なものである。翌大正十三年（一九二四）二月、荒谷さんの船が横浜に帰港したときには、船は震災復興物資を満載していたという。

港々に女ありという俗説がある。しかし荒谷さんにかぎっては品行方正、温雅敦厚、そんな不動慎な質問はたちまちはねつけられて、うかがったのはほとんど牧歌的なにおいのたちこめる一篇の佳話であった。コーンウォールのフォウエイは、ひなびた田舎の港町である。その町に姉は二十三、妹は二十の佳人の姉妹がいた。荒谷さんが二十六、七歳だった昔のことである。気位高い英国女性の



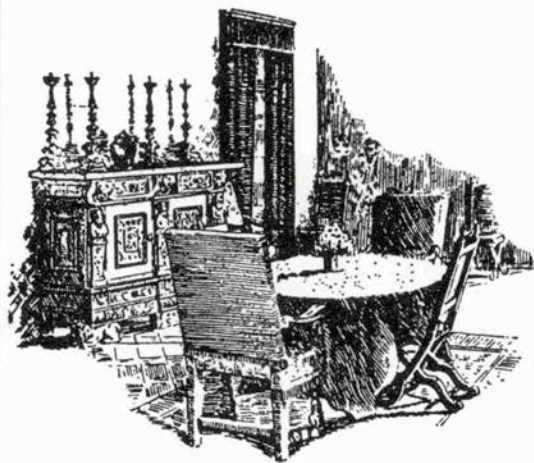
世界地図をひろげて海の話はいつまでもつづく。

つねとして、容易にひとを家庭には入れない。しかし荒谷さんだけはあたたかく迎え入れて、船が港に着くたびに楽しい時間が過ごされた。トランプ遊び。謎かけ遊び。辞去する間際の軽い夜食。そしてここノーフォークの町では、いつでも船が出港するときには、町中の老若男女が手をふってこれを送る。海と船とがはぐくむ人間の友情について語る荒谷さんの眼は回想になごむ。

荒谷さんはまた、戦争下の荒波を力強く乗り切った人物である。昭和十八年（一九四三）、はじめて船長として乗務した船は、大連汽船会社の撫順炭を内地に運ぶ貨物船であった。そして戦局もおしつまった昭和二十年（一九四五）、荒谷さんが乗務したのは「油還送特攻隊」シンガポールでガソリンを満載し日本に運ぶという特別任務であった。その年一月に門司を出港した船が四隻、途中上海沖で四散して、シンガポールに行きついたのが二隻、三月十三日に和歌山県下津に帰還したのは荒谷さんの船一隻だけだったというから、いかに危険きわまりない作業であったかはおのずと知られよう。が、それを語る荒谷さんの口調は恬淡そのものである。

最近にぎやかに報道される某々青年のヨット世界一周あれはどうですか。——この質問に対する荒谷さんの答えはきびしかった。あんなことはなるべくやらない方がいいと思います。一瞬、言葉に海の男のプロフェッショナルとしての気魄が満ちた。事の成否はともかく、アマチュアリズムの甘えをみじんも許さない気配。陸にあがってはや五年、しかしこの人物の精神には荒海怒濤がいまも沸々とたぎっているのである。

欧風家具・婚礼家具



設計・創作

# 永田良介商店

神戸市生田区三宮町3丁目 大丸前 TEL神戸(391)3737

(代表)

東京店・東急百貨店(日本橋店内6階 TEL03(211)0511

本店(渋谷)7階 TEL03(462)3180

工場 神戸市垂水区多聞町小東山975-35

神戸木工センター TEL(078)706-5913

装いは人。生活。



O-SHIBATA

# 柴田音吉洋服店



神戸・元町4丁目南  
大阪・高麗橋2丁目

神戸 341-0693  
大阪 231-2106

# 世界の福祉施設

欧米の心身障害者を訪ねて

橋本 明著 <カラー8ページ、本文320ページ、定価 1000円>

送料 200円



●福祉時代の幕開けです。あなたも一冊ぜひどうぞ！

## 主な内容

- 神戸からシアトルへ
- クライシス・クリニック
- グッドウィル・インダストリーズ
- 里親発見活動
- フォースターグラントペアレント
- ファーストアベニュー・サービセンター
- ボランティア・ビュロー
- 病院におけるボランティア活動
- レニア・スクール
- アメリカのグループホーム
- 社会福祉とPR活動
- 砂漠の中の老人の町
- ボーイズ・タウン
- パーキンス盲学校
- スポック博士の子供博物館
- アピリティーズ
- ロンドンのバーナードホーム
- 奇蹟の町・ルルドを訪ねて
- コペンハーゲンの老人の町
- ベーテル——西ドイツの障害者の町（ドイツ）
- ヘット・ドルプ——未来を拓くオランダのコロニー（オランダ）

各書店で好評発売中！

振替口座 神戸四五一九六

お申込みは月刊「神戸っ子」編集部まで。神戸市生田区東町113の1 大神ビル8F TEL(331)2246

# ★神戸の催し物10月ご案内

## 〈音楽〉

★桜田淳子リサイタル

6日(日) ①11時半 ②2時半  
神戸文化ホール S・一五〇〇円  
A・一三〇〇円 B・一〇〇〇円  
C・一五〇〇円

★紙ふうせんと古井戸

7日(月) 6時半 神戸文化ホール  
一〇〇円

★赤い鳥の後藤悦治郎と平山泰代の二人が新しく結成した「紙ふうせん」と「さなえちゃん」でおなじみの「古井戸」の共演。ゲストに神戸出身、自然の中の乞食と自称するシンガーソングライターのはねおか仁。

★岸洋子リサイタル

7日(月) 6時半 神戸国際会館  
A・二〇〇〇円 B・一八〇〇円  
C・一五〇〇円

★関西マンドリン合奏団

第16回定期演奏会  
8日(火) 6時半 神戸文化ホール  
一〇〇円

★フォーク74近畿Bプロック大会

10日(木) 2時半 芦屋ルナホール  
前売・三〇〇円 当日・五〇〇円

★芦屋市文化祭音楽研究会

19日(土) 2時 芦屋ルナホール  
無料

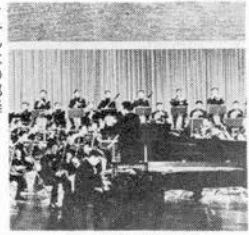
★中国中央楽団日本公演

22日(火) 6時半 神戸文化ホール  
S・三八〇〇円 A・三二〇〇円  
B・二六〇〇円 C・二〇〇〇円  
D・一五〇〇円



伊藤 ルミさん

★神戸っ子読者6名様「伊藤ルミリサイタル」(10/25)にご招待  
神戸出身の女流ピアニスト伊藤ルミさんが第三回リサイタルを聞く。超人的技巧を必要とするリストの修道僧として深りの日々を過ごしながら作曲した晩年の深い宗教性を帯びた作品を演奏する。楽書で住所・氏名・年令・職業・TELをお書きの上、神戸っ子編集部まで。先着順。



中国中央楽団管弦楽団

★みんなの邦楽

24日(木) 6時半 神戸文化ホール  
一般・一七〇〇円  
市民会員・一三〇〇円

★ウィルヘルム・ケンプ ピアノリサイタル

25日(金) 7時 神戸国際会館  
S・五〇〇〇円 A・四四〇〇円  
B・三八〇〇円 C・三〇〇〇円  
D・二〇〇〇円

★伊藤ルミピアノリサイタル

25日(金) 7時 神戸文化ホール  
一〇〇円

演奏曲目/エステ荘の噴水、波を渡るパオラルツ、リゴレットパヴァーレス、オーパーマンの谷、ハンガリア狂詩曲No.2

★芦屋市合唱隊

27日(日) 1時半 芦屋ルナホール  
無料

★神戸女学院大学音楽部定期演奏会

28日(月) 6時半 神戸文化ホール  
一〇〇円

★ウィーン弦楽四重奏団

28日(月) 7時 神戸国際会館

一般・二〇〇〇円 学生・一二〇〇円

★フォークロックコンサート

30日(水) 6時半 芦屋ルナホール  
一七〇〇円

★アルフレッド・ハウゼンゴオーケストラ

30日(水) 6時半 神戸国際会館  
市民会員 A・二七〇〇円 B・二二〇〇円  
一般・三〇〇〇円

ドイツのコンチネンタルタンゴの雄、ハウゼ。「ジェラシー」「真珠とリ」との他映画音楽、ヒットメロディ、世界の民謡など美しくスプリングスははらかな嬉愁に誘う。

★新制作座「江戸城総攻め」(演劇)

2日(水) 3日(木) 5時50分  
神戸国際会館 S・三〇〇〇円  
A・二五〇〇円 B・二〇〇〇円  
C・一五〇〇円

★俳優座公演「検校菅一」

11日(金) 15日(火) 6時15分  
13日(木) 1時半 神戸文化ホール  
一三〇〇円

★劇四季公演

「ウエストサイド物語」  
26日(土) 6時 神戸文化ホール  
A・二五〇〇円 B・三〇〇〇円  
C・八〇〇円



ウエストサイド物語

ジェローム・ロビンズ作のブロードウェイ・ミュージカル傑作。主演のマリアに雪村いづみ、その

恋人のトニーに鹿野丈史、ジュエツト団の団長リフに飯野おさみ、シャーク団の団長ベルナルドに都町行雄との恋アフリタに立川真理、という顔ぶれを中心としたこの配役は、数回にわたるオーディションによって選ばれたベスト・メンパー、日本で上演されたミュージカルの名かでは間違いなく最高のできと評価されたこの舞台、日本のミュージカル史上に大きな記念碑を打ち立てたものといえる。

★オペラ「フィデリオ」

30日(水) 6時半 神戸文化ホール  
労音会員 S・三五〇〇円  
A・三二〇〇円 B・二七〇〇円  
C・二二〇〇円 一般 S・三八〇〇円  
A・三五〇〇円 B・三二〇〇円  
C・二七〇〇円 D・二二〇〇円

〈その他〉

★第2回神戸能

10日(木) 11時 神戸文化ホール  
特A・五〇〇〇円 A・四〇〇〇円  
B・三〇〇〇円 C・一〇〇〇円



正尊 観世元昭

番組/塚々乱・双之舞・仲光・愁傷之舞、花雀・雀之伝、恋重荷、正尊・起請文・潮入

★マイサケラハム舞踏団

16日(水) 6時半 神戸文化ホール  
A・三五〇〇円 B・三〇〇〇円  
C・二五〇〇円 D・一八〇〇円

★花柳流いざよひ会公演

20日(日) 10時 神戸国際会館

一五〇〇円



エチオピアからケニアへの道はウエンド (wendo) という所から二手に分かれる。これから先が東アフリカの一般コース上の最も困難な地域である。どちらのコースを取っても地図上では四輪駆動車に適すと標示されている道路である。私はヒッチハイカーがほとんど行かない方のルートを取った。と言えば聞こえはよいが、私も寝過ぎた為こちら行のバスしかなかった。私の旅にはどうも寝過ぎが一つのポイントとなる。過去四回寝過ぎで飛行機に乗れている実績もある。もっとも一年くらい遅れても別にこれといったさしさわりのある旅ではない。今回もネゲレレという所までは道がよく、寝過ぎた事に感謝し、象にでも踏ませてこなごなにしておろすかと思っていた時々ベルの鳴る目覚し時計を思いおして、リュックの底に仕舞い込んだ。

満席のバスの中で突然、ワッハハハ、ワッハハハハ、という笑声が起った。初めは周りの人々が何が起こったのだろうとあたりを見渡しキョロキョロしていた。私も周囲の人と同じ様にキョロキョロした。あたりが静けさを取り戻すとまたもや、ワッハハハ、という笑声が人を馬鹿にした様に三回繰り返された。今度は車掌が車を停まらせて、この世にふって沸いた様な

### ●奇術師アフリカの旅〈3〉

## ケニアへの道

福岡康年

〈アフリカスペシャリスト〉



▲ケニアの子供、トラックからバチリ



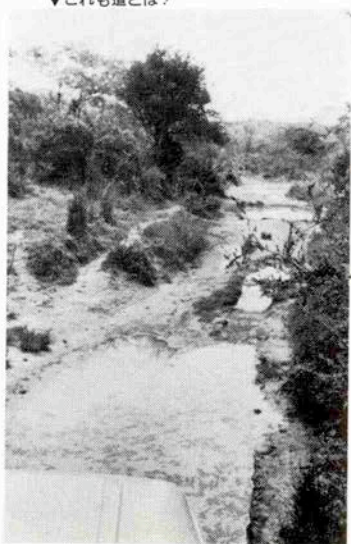
奇妙な笑声の原因を突きとめるべく、声のする所へやって来た。お客はキツネにままれた様な顔をしている。車掌は周囲の人に色々たとずねているが、お客はさっぱりわからないという表情をするだけである。車掌は私の所に来て英語で「何かわかるか」とたずねてきた。私は「多分、腹話術の名人でも集まっているのだろう」と答えたが、腹話術というややこしい英語の単語 (Ventriloquist) が通じるわけがない。少し騒ぎが大きくなりすぎてしまった。それ以後はネゲレレに着くまで、バスの中は、不思議な笑い声についての話題で持ち切りの様子だった。

この不思議な出来事はきつと、数日間はこの村でそして、車掌によってエチオピアに広く語られるにちがいない。そして私は、皆んなに見てもらおうチャンスを失ない、バックの中でいらだっている。笑い袋に同情を寄せた。

ネゲレレについてすぐ国境へ行く車を捜すため、警察軍隊、税関等に行ったが、答はきまって「さあ、近日中には期待出来ないよ、デイラまで引返した方が早いでしょう」との返事。このまま引返したのでは、せっかくの寝過ぎが無駄になるし、先程引起した事件の同じバスにのるのは気が引ける。まあ、二、三日待つてみよう



▲道なき道をトラックでいく



▼これも道とは？

と思ひホテルに入った。三日たつても警察からも軍隊からも何の連絡も入らない。その間の私の仕事といえは、毎日ノミを何匹取るかという事だけ、第一日目は、ノミ、南京虫合計二十一匹、第二日目、計十二匹、三日目になると乱獲がたつて、わずかのノミ四匹、それも午前中に終つてしまひ、隣のベットまで出張して獲物をあさりに行つた。以前に、スーダンの田舎で、やはり退屈しのぎに、ハエを取つていた。最初は馬鹿にしていたボーイも、十匹ごとにまとめてテーブルの上においているハエが六十匹を過ぎる頃から興味を示しはじめ、部屋の前を通るたびに「何匹になった？」ときく様になつて来た。いくら取つても切りがないので、食事時に中止して、かぞえてみると、百四十二匹。どうもアフリカに來たせいかハンテングの趣味が出來た様である。

四日目、ついにトラックが來るといふ情報が入つた。すぐ荷物をまとめて税関に走つた。下に石を積み、その上に家具らしきものと、二頭のヤギを乗せたトラックがやつてきた。どこから聞いてくるのか、すでに十人くらいの人と同じトラックを待つていた。それぞれ座れそうな場所を取り、いよいよ出発である。ものの十分も走つただらうか、車は突然林の中に入つて行く。どう見ても道はついていない。木を避けながらジグザグに進む。

しばらく走ると、道らしきものが前方に見えてきた。この道を行くのかと思つてみると、小枝をバリバリという音を立てながら、林に突込んで行く。大木があるとそれを避ける為にバックしたりしながら進む。そしてまた

道らしきものに戻る。道路に水がたまつておりそれを避けて林へ突込むのである。その度に木にふれるので、毛虫が何十匹と身体に落ちて來る。毛虫と茶わん蒸しのきらいな私は、あわててそれをつまみ外へ放り出す。低い木の場合は助手が大声を出すと、全員、トラックの床に伏せる。木の多くはトゲがあるので、タイミンクよく伏せない、顔をひつかかれる。運動神経が坊ちゃん育ちの私にはひつかかれるという方が無理です。その上毛虫である。毛虫に氣を取られていると、パリッとやられる。毛虫はいやだし、かといつてヤクザになるつもりもないので、敢て顔にきずを作る必要もない。ワメキ声と共に頭をひよいと引込める。まるでカメが調教されている様である。

原地の人は、毛虫をあまり気にしないので、女の人の首筋の所等にも毛虫がはつていると、当事者でもない私の方の首筋が氣持悪くなつて來る。私がつまんでやつたらいのだが、うっかり首筋に指でもふれようものなら「何するのよ、ジャバンのセックス・アニマル」等と言われ張り倒されるかも知れない。私はイライラし通してである。

私はこのコースを走つていて、道というものはここで即ち存在しているものではなく、車が走つたあとと道が生じるのである。

「君の前には道がある」などという氣障な言葉は思ひ上つた文明人の愚言でしかない。(つづく)



☆神戸を福祉の町に(10)

上のマークは車イスで使用できる箇所にはられる国際シンボルマークです。

## 手話相談員の普及を

橋本 明

「手話はろうあ者の母国語である」とはよく言われる言葉だが、耳の不自由な人たちにとって手話はあたかも母国語のように、コミュニケーションの手段として欠かせないものとなっている。最近のろう学校ではたてまえとして口話法(口の動きによって言葉の意味を読みとること)による教育が行なわれてはいるが、ろうあ者同志ではやはり手話による意志の伝達が一般的に行なわれている。しかし、手話にたよるろうあ者にとって一番大きな悩みのタネは何といつても健聴者とのコミュニケーションである。ろう学校を卒業して就職する場合、この言葉の問題がまず第一に大きな壁となって立ちふさがってくる。言葉による自由な意志の交換ができないために対人関係がうまくいかず、職場で孤立して辞めてしまうケースは非常に多い。

こんなろうあ者の悩みに耳を傾け、就職のお世話をしたり、アドバイスをする「手話相談員」が昨年の四月、兵庫県下では初めて神戸公共職業安定所の援護係に置かれた。担当の松岡美奈子さん(40)は以前保育園や県の肢体不自由児施設「のじぎく園」で保育をしていたこともあり、四年前福祉センターでタマママ手話の講習を受けたことがあったため、昨年の四月からこの職安で耳の不自由な人たちの就職のお世話をすることになった。

ところが手話相談員というのは県から一カ月にたった六千円の予算しかでないため、一カ月に二回(一回が二時間)しか仕事ができない。これではとうていろうあ者のために本腰を入れた仕事ができないので、松岡さんは手話相談員の他に「心身障害者職能復帰推進員」という

イカメシイ肩書をつけられて、こちらの肩書の方で一月に二〇日、毎日朝九時から夕方四時までろうあ者を含めた心身障害者の就職のお世話をしている。

今までは援護係に手話のできる人がいなかったため、ろうあ者の相談は筆談でやっていたので大変時間もかかり、十分満足のいくお世話もできなかったが、松岡さんのおかげでぐっと能率もよくなり、相談に来る人もずいぶん増えたそうだ。

「一日平均三人ぐらい来られるかしら。若い人が多いよね。長い人は半日ぐらいしゃべってるの(笑)県下には手話相談員が少ないので私も時々明石や灘の職安へも手伝いに行くの。遠い人は四国や九州からも相談に来られるわ」という松岡さんは、ここへ来て話をするのがとっても楽しく、仕事に大変張り合いがあるそうだ。「通訳というのは自分の感情をいれずに話の内容をそのまま伝える必要があるけど、相談員は身ぶり、手ぶりで話合えるから私に向いているの。ただ手話ができるだけでは相談員としてダメですね。相談にのってやるから来なさい、という態度や、お役所仕事みたいになってもダメです。ろうあの人たちは敏感ですからね。相手の気持をよく理解してあげようという気持があれば手話は下手でも通じますよ(笑)」というのが松岡さんの持論だ。ろうあ者同志が口コミで松岡さんの話を聞いて職安をしばしば訪れるのも、彼女のくつたくのない、親しみやすい人柄のせいであろう。

ところで、兵庫県下には18カ所に職安があるが、手話相談員がいるのは神戸と姫路の二カ所だけ。全国あわせ



九州からやってきた青年と話合う松岡さん

ても40名と非常に少ない。市内で手話のできる人が常駐している公的機関といえはこの神戸公共職業安定所の他に、神戸市役所内の障害福祉課、神戸市社会福祉センター、それと県民会館4階の兵庫県身体障害者連合会事務所の四カ所のみ。

社会福祉センターで聴力障害者相談員として耳の不自由な人たちの生活相談を担当している中森千代さん(61)は、37年間県立神戸ろう学校で教師をしていたというだけあって、聴覚障害者の問題には大変理解が深く、昭和37年にボランティアの竹中昌子さんと共に全国で初めて神戸ろう学校に垂友会という「聴力障害者親の会」を創り、全国に広めていった熱心な活動家でもあるが、中森さんは本当にろうあ者理解のある通訳者をぜひ幅広く育てていきたいという。聴覚障害者は一見したところ、外見上は健聴者(耳の聴こえる人)と何ら変らないため、理解の不足によって知らない間に誤解されている事が非常に多い。

「手話はろうあ者の母国語である」と冒頭に述べたが、同じ聴覚障害者といっても、難聴者や中途失聴者には手話よりも口話の方が理解しやすい。公立病院、公立図書館、福祉事務所、警察、駅、デパートなど、少なくとも公的機関や人の多く集まる場所には手話相談員を置くと同時に、オーバードプロジェクタか電光文字板等の掲示伝達の常設と筆記通訳者の設置をしてほしい、とい

うのが中森さんの願いである。

現在、神戸市で身体障害者手帳を持っている聴覚障害者は約三〇〇〇人もいる。そして、中耳炎、ストマイ、メニエル氏病、自律神経失調症、外傷、騒音病、突発性難聴、神経性難聴などによる中途失聴者は年々増えつつある。しかし、こうした聴力障害者は全国のひとつの職業訓練所から締め出されており、職業訓練を受けたり、再就職するのは非常に難しくなっている。それは通訳者がいないから、というそれだけの理由による。また演説や各種の講演、講座にも通訳者がいないため、参加することができないのが現状だ。

新神戸ろうあ協会の「神戸市の福祉行政に望みたいこと」という要望書の中には、テレビの緊急ニュース(例えば台風情報や交通情報)だけでも字幕を入れてほしい、この場合手話通訳を同時に写してもらえないか。ろうあ者がいつでも使えるようならろうあ会館を建ててほしい。難聴、中途失聴者のために筆訳者の養成と常任をぜひ考慮してほしい、交通機関の車内緊急情報の場合(駅放送も含めて)文字板掲示をぜひしてほしい、日常生活に介添してもらええる通訳者を大勢常駐してもらいたい、などという切実な願いが多い。全日本ろうあ連盟でもここ10年来、手話がでる専任福祉司や専門的通訳の行政的设置を政府や自治体に対して要求し続けている。

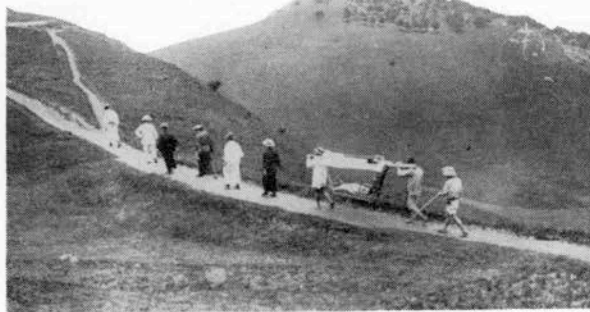
神戸市では三年前から「ボランティアスクール・手話コース」というのを始め、また難聴者・中途失聴者及びその家族や関係者のために「読話講習会」も開いている。四年前の知事選挙の時は立会演説会で手話通訳が行なわれたのは新しい試みであり、「ろうあ者の市民講座」も開かれるようになった。ほんの少しづつではあるがろうあ者のための動きがでてきたようだ。

「障害年金よりも自分の力でどうしてもできないものを行政の力でカバーしてほしい」という中森さんの言葉は聴力障害者だけでなく、身体にハンディを負った人たちのみんなの声といってよいだろう。

# OLD KOBÉ 六甲山鳴動

1 あおば しげる

宝塚へ至る道 (1905年ごろ)



アイスロード (1912年)



〈写真提供 西村雅司氏〉

最近妖怪趣味とかオカルト現象(ポルトガル語、陰魂学とも訳されている)が大流行でなんでもかんでも不安心理に結び付けたがる傾向があるが、他方では「日本沈没」という小説がベスト・セラーになったり、人口過剰でこのままゆくと二十世紀末には地球上に餓死者があふれる——などの文明観が行なわれている。昭和元禄の唯中でこんなささやきが高まってきたことは、あるいは満ち足りてふとのぞく人間心理の常かも知れぬが、それだけの各種の社会不安がわれわれの足元にしのび寄っていることも事実のようである。

ところで、こうした現象はいつの時代にも時を得て発生したもので、たとえば筆者のこどもの頃にもいろいろ不安な出来事やささやきがあったことを思い出す。大正時代大きな事件では大正七年の米騒動があったし、いつだったかそれから何年かあとコレラの上陸にびっくりさせられた。米騒動の時筆者は神戸の上沢七丁目に住んでいたが、栄町五、六丁目から神戸駅の方へかけての一带を中心に全市を恐怖のどん底におとし込んだ暴動の恐ろしさをこども心にもまさまさとおぼえている。すぐ横に米屋があったが、暴徒が今にも襲ってくるといううわさにおびえた米屋の家族たちが真っ青な顔をして戸締まりに必死になっていたのをこども心に恐怖の目で見守っていたものだった。コレラ事件の時は葺合区八幡町に住んでいたが、付近一带に多い商社や赤レンガの倉庫の壁に牙をむき出した虎の絵を描いた貼り紙がされて「虎烈羅(コレラ)来襲!!」と書かれていたのを立ち停まってこわごわ盗み見たものである。このほか上沢時代にかの有名な入江三郎事件(精神病院の入江が脱走して、通行人を殺傷した事件)が発生して夜間の外出絶対禁止が強制されたこと、また当時「子取り」のうわさが全国にひろまったため、夕方になると子を持つ親は真剣な表情で外のこどもたちを家と呼び戻したものだ。「早う帰らんと、子取りにつかまってサーカスに売られるぞ」という近所の親たちの声が今も耳に残っている。

六甲山鳴動事件も今から思えば、一種のオカルト現象として当時の神戸市民たちを不安な気持ちに追い込んだものといえる。これは上記の大正期ではなく明治三十二年七月七日から突如として発生、翌年の三十三年二月へかけて八カ月間にわたって六甲山が鳴動をつづけたという風変わりな事件である。

六甲連山（現在は神戸市、当時は武庫郡）は神戸市民にとつてはあまりにも慣れ過ぎた存在となつていっているせいか、今日の若い人々の中にはかつて休火山であつたことを知らぬ者も案外多いのではないかと思われるが、明治の頃は地震学や高山に対する科学的調査研究が未発達だったし、登山も一般的ではなかつたから六甲山という深山幽谷を近寄りたがたい存在とする考え方が一般的だった。有馬温泉に行くには神戸の平野から入り込んで今日の鈴蘭台、唐櫃を経て行く有馬街道か宝塚から武田尾、蓬来峠を経て行くかの二つのコースがあつたが、なかには当時すでに阪神間に鉄道が開通していた（明治七年以来）ので住吉駅で下車して徒歩かカゴに乗って登山し、苦勞の末有馬へたどりつく人も少なくなかつた。現在も同駅の北側約二百五十メートルの路傍に有馬への道を教える石の古い道標が残っているのも興味深い。その六甲山からゴーツという轟音が聞こえ出したのだから、市民があわてたのもムリはあるまい。この間の消息を伝える明治三十二年七月十九日付第七面の又親日報（ゆうしんにつほう）の新聞記事は左の通りである。

「本月以来有馬郡有馬町附近において時々遠雷又は砲声の如き鳴響ある由はすでに記載したりしが右に付き其筋の報告なりと云ふを聞くに鳴動は十七日午前七時十八分に起りしもの如きは最も強く其方向はさらに南方に偏し単に一回の縦動を感じるもの多く横動少し又震動時間短く一日中五回及至十回に及び之が為め内外人の浴客洵々として畏怖し目下避暑客入浴の好時期なるにも拘らず掃去するもの多く十七日の如きは町内六十余輛の人力車悉皆出尽し不得止籃輿（カゴ）又は徒歩にて掃遂に

就くものあり又すでに此事を伝聞せしものは来浴せざるが為め町民間に大恐慌を来し道路浴場皆な此不祥なる鳴動の嘆声ならざるはなし然るに十七日夕俄然風説ありて此鳴動は六甲山中にて採石の爲め『ダイナマイト』を使用し居れば夫れが余響なるべしと——此採石は故有栖川宮故川上（こかわかみ）大將の墓石に充つるが為めなりと云ふ而て此風説と音響と其方向とを合せ考ふるに風説全く無根にもあらざるが如き模様なるを以て目下松林神戸測候所長より御影分署へ照会中なりと云ふ」

こうして徐々に真相は解明されてゆき、その後来神調査に当たつた今村理學博士（地震博士）が「鼓ヶ谷から二十丁離れた茄子ヶ谷にいつか大きな空洞ができており、それへ落ち込む岩塩と鉱物質のかたまりが発する音こそが『犯人』である」といつた声明でようやくケリがつくことになった。だが、一時は有馬温泉の湯が摂氏五、六十度の熱湯になったり、熊内町の雲中小学校が鳴動の影響で校舎が傾くというような事件まで発生して今にも六甲山の大爆発が起ころのではないかと全市民の心を恐怖に馳りたてたものだった。この機会をとらえて當時神戸新聞の社会部長をしていた文士の江見水蔭がみずから六甲登山を試みて「六甲山探険記」という少々センセーショナルな本を出版しているのも今では懐かしい思い出である。だが、六甲山はその昔嘉永年間から鳴動事件があつたと「西郷村々誌」は書いているし、安政元年八月に六甲山が震源地と思われる強震があつたとも伝えられているから、これが最初の事件ではなかつたわけである。それにしても筆者自身も子どもの頃の頃はよく親たちから聞かされたものだった。

後年になつて晩年の村上華岳や林重義などの神戸に縁の深い画家たちが好んで描いた六甲山にこうしたエピソードが秘められていたことを知ること、神戸市民としては少なからず興味をそそられるところではなからうか。

（四九・八・二八記）

後記 このシリーズについては荒尾親成、別車博賢、松岡寛一氏はじめ

各方面の方々の援助を得ました、厚く御礼申しあげます

SALON

# KOBE JIDAI



ファッション時代のミニサロン

月刊神戸っ子では、この度、サロンを開設することになりました。北野町、山本通界隈のファッションナブルな通りに面したコンパクトなたまり場です。

スナック・スタンド風のサロンということになります

名前は新しい神戸時代を目指して「神戸時代」という風変りな名前をつけました。

・神戸っ子の憩いの広場であったり、談論風発のサロンにもなり、ミニパーティーがひらかれたり、ミニ発表会が行われたりして素晴らしい情報交換の場になります。

8月26日(月)オープンしております。何卒お誘い合せお越しく下さい。

毎夕5時半閉店(日曜は休み)

SALON 神戸時代

神戸市生田区中山手通1丁目28

シャトーコトブキビル 1F

TEL 242-3567



# ★神戸の集いから

□「渦」の15周年記念大会神戸で

前衛俳句の赤尾兜子さん主宰する「渦」の49年度大会が15周年を迎え、神戸で開かれた。第1部は8月17日県民会館、第2部は8月18日県民会館、六甲荘、第3部は神戸観光というスケジュールで全国から約百名が参加。このところ自宅静養中の赤尾兜子さんも、少時姿を見せて句会、パネルディスカッション、懇談会など多彩な催しが行われた。本誌第三回ブルーメール賞を受賞した小泉八重子さんの報告もあって15年間のたまったウミをしほりだそうという「渦」の大会は熱気がこもっていた。



前衛俳句の「渦」がもう15年に

□フランス・ファッションの粋

白い椅子。白いミニ。化粧するマスカン。小鳥の声。

一九七四～七五年オートクチュールパリコレクション(ユニセフチャリティ)のイントロ。東京のホテルニューオータニで開かれた。パリでは望めないという初めてのショーは、バルマン、カルダン、デオール、ウンガロ、クレージュ、ジバンシイ、グレ、ギ・ラローシュ、パツウ、シエレル、ランバン、ニナ・リッチ、アネ、サンローランが参加し、洗練されたパリのアートな心を見せてくれた。このショーに神戸からも福富芳美、砂川松枝、藤本ハルミ、本誌小泉らが出席。



パリ・コレクション・ショーの会場で

☆新しい関西を創造する総合雑誌  
オール関西

〈十月号予告〉



☆グラビア

「女の四季」

皆川千恵子

「万葉記」

犬養孝

「しにせの心」

対話シリーズ

☆特別企画

大阪上町台地

長沖一／山村糸／吉田留三郎

☆美術座談会

山口長男、津高和一

乾由明

☆「ハタセンのミニ博物誌」⑥

畑専一郎 え・中西勝

☆「織田作之助伝」③②

大谷晃一

☆「大阪ものがたり」⑭

石濱恒夫

☆「夕ぐれに苺を植えて」⑬

足立巻一 え・津高和一

☆「現代と伝統」⑩

吉田光邦

☆「アラブ大使の声」

林辰彦

月刊オール関西編集部

大阪市北区梅ヶ枝町八〇

梅新東ビル七階

TEL 06-561-2434(代)〜7